



津々井 茜

special thanks to ☆ito ☆kinoko ☆moto

1

見た目は普通の三兄弟であろう。丈人、真次郎、章。普通とはいっても、兄たちは大柄で弟は小柄というところはあるのだが、百八十三センチと百七十九センチの兄貴たちに対して、百六十一センチしかない弟の俺であっても、それほどには不思議ではない。そんな兄弟もよそにもいるのかもしれない。

ちびではあるが、俺はごく普通の十五歳だ。兄貴たちが変なのだ。十九歳の真次郎も、二十一歳の丈人も変ったら変だ。まあ、それについてはおいおい説明するとして。

三年前には長兄の丈人が、一年前には次兄の真次郎が、大学に入るために故郷を離れて上京した。両親はいるのだが、兄弟のうちでは俺ひとりが故郷に残され、俺はピンチに陥った。それまではでっかい兄貴たちに守られていた俺が孤立無援になった途端に、中学校の連中が牙を剥いて襲いかかってきた。

高校生までの兄貴たちは、俺が苛められるといつだって守ってくれた。仕返しだってしてくれた。だもんだから、俺にはガードマンがついているようなもので、ワルの連中たちからは治外法権的立場にいたのだった。

「章、おまえが弱虫だからだろ。しっかりしろ」

「俺たちが鍛えてやるって言ってんのに、逃げ回るからだ。真次郎、章をつかまえろ」

逃げ足だけは速いつもりの俺が逃げようとしても、でかい兄貴たちに阻まれて軽く殴られたりはした。しっかりしろ、強くなれ、とは言われていたし、殴られもしたが、不良に囲まれてぼこぼこにされるよりはましだ。

丈人がいなくなってからだって、真次郎が俺をかばってくれた。だが、真次郎までがいなくなってしまうと、舌なめずりして牙を出した不良どもの格好の餌食にされたのだ。

「だからさ、俺も東京に行きたいよ。高校から東京ってのもいいだろ。兄ちゃんたちは東京でふたりで暮らしてるんだから、俺も兄ちゃんたちのマンションに住まわせてもらおう。東京に行かせてよ」

不良たちに強請られ、たかられ、金を巻き上げられて家に帰った俺は、両親に訴えた。両親は渋っていたのだが、このままでは末っ子が再起不能になるとでも思ったのか、東京行きを許してくれた。

東京の私立高校を受験して合格した俺は、兄貴たちが住むマンションに同居もさせてもらえるようになった。真次郎が大学二年、丈人が四年、俺が高校一年生になった春から、三兄弟は東京暮らしとなった。

故郷にいたころからでかくて強い兄貴たちだったのだが、異様なほどではなかった。だが、俺の知らない一年の間に、兄貴たちにはなにが起きたのか。いまや異常だ。こんなの、人間では

ない。

「あるとき、宇宙人が訪ねてきたんだよ」

真次郎が言い、丈人も言った。

「おまえたちはこれからは地球の平和を守れ、って言われてさ」

「おまえたちに地球を託す。って一か、地球上には各地域に俺たちみたいのがいるんだよ。そうそう広い地域は守れないから、俺たちは地球防衛軍の、この地域担当のメンバーってわけだな。もともと俺たちは強かったからこそ選ばれたんだ。そうやって宇宙人の基地に連れていかれ、身体を改造された。そうしてさらにパワーアップしたんだよ」

「そうそう。真次郎の言う通りだ」

信じられるはずがないので、俺は言った。

「シン兄ちゃんはガキのころからウルトラマンとかが好きだったよね。それが高じて夢でも見たんだろ？ タケ兄ちゃんまで巻き込まれてるの？ 目を覚ませよ」

「嘘だと思いたいんだったら思ってていいよ。真次郎、パトロールに行こうか」

「章には地球防衛軍は無理だろうから、おまえは留守番してろ」

そう言い残して、ふたりの兄貴は虫に変身した。信じられないと言ってみたところで、目の前で変身されてしまっは、信じるしかなくなってしまう。宇宙人だの地球防衛軍だのが嘘なのだ、と考えるおくしかない。

虫になると口がきけなくなる兄貴たち。どっちがどっちだかは、真次郎が青で丈人が赤なので区別はつく。俺だけが仲間はずれなのは悔しいので、つかまえて握りつぶしてやろうとしたこともあるのだが、虫は虫でもメカ昆虫というか、Insect of machineというか、鋼鉄製のボディをしているようで、握りしめると高温を発する。俺の手が火傷しそうになった。

まあ、兄貴たちを握りつぶしてはいけないだろうし、普段は人間なんだからいっか。地球防衛軍だかなんだか知らないけど、がんばってね、と俺は、窓から飛んでいく二匹の鋼鉄虫を見送っていた。いや、鋼鉄虫ではなく、地球上には存在しない特殊合金製の虫なのであろうか。

そんな兄貴たちなのだから、異様なまでに強い。故郷にいたころには俺を苛めるガキあたりをやっつけていばっていたのだが、俺の知らないところでは、大人と立ち回りでもやっていたのかもしれない。特に武道の心得などはないはずだし、背は高くても筋肉ムキムキってほどでもないのに、いまや人間離れして強いのだ。

宇宙人云々を信じるとすれば、信じないとしても、特殊合金虫に変身する兄貴たちなのだから、人間離れしているのは当然か。

「そうすっとさ、地球には宇宙からの侵略者が入り込んでるの？」

人間の男の姿をして、窓辺で暢気にギターを弾いている真次郎に、俺は尋ねた。

「そいつらから地球を守るための使命を帯びてるわけ？」

「章、おまえもだいたい信じられるようになってきたみたいだな」

「信じてないけど、一部は信じるしかないじゃん。俺だって変身する兄貴たちを見てるんだもん。時々虫になって窓から飛んで行って、なにをやってんの？」

「おまえの言う通りだよ。人間たちにひそんでよからぬたくらみを着々と進行させている、悪の

手先の宇宙人どもを見つけ出し、地球侵略の野望を打ち砕かんと、俺たちは日夜努力してるんだ」

「……やっぱ信じられない」

「おまえが信じてくれなくてもいいんだよ」

三人で外食したりすると、都会の夜にはよからぬ男もいる。兄貴たちは耳も特殊改造されているのか、微妙な物音をキャッチしてそこへと入り込み、女に妙な真似をしようとしている男を、一撃のもとに蹴飛ばして追い払う。

喧嘩には昔から強い兄貴たちだったのだが、サッカーボールでも蹴飛ばすようにキックしただけで、悪い男は数メートル吹っ飛ぶのだから、どうしたって人間技ではない。

そんなシーンなら俺も目撃した。それでも、そいつらは人間なのだから、軽く蹴飛ばして追い払うだけなのであるらしい。侵略者にはいったいどんなふうになん？ 俺もついついつられて、ヒーローもののテレビドラマみたいなのかな、と想像してしまうのだった。

兄貴たちは背が高く、顔立ちも悪くはない。丈人と俺は母似で綺麗な顔をしていて、真次郎は父似でワイルドな顔立ちだと昔から言われていたが、ちがったタイプの兄貴たちはいずれも昔からもてていた。俺ももてなくはないのだが、それはまあいいとして。

外見も悪くはない兄貴たちに危機から救い出された女は、いちころで兄貴たちに参る。女ってのは結局、強い男が好きなのだ。

男三兄弟だと自炊なんてのは面倒なので、俺たちはたびたび外でメシを食う。今日も丈人が帰宅してから、ラーメンでも食おうかと外に出ていった。ラーメン屋ののれんをくぐろうとしていると、丈人が言った。

「ちょっと待ってろ」

「兄貴、また？ 俺は行かなくていいのか」

「いいよ。あんなの、ひとりで十分だ」

真次郎とふたりして待っていると、どすっという音がして、ラーメン屋の裏手の路地から、男が蹴り出されてきた。そいつはなにが起きたのかもよくわからない様子で、はるか遠くのゴミ箱に激突してぼけっとしている。俺は経験上、なにが起きたのかはわかる。真次郎にもわかっているのだろう。当たり前だろ、ってな顔をしていた。

「ありがとう。でも……」

「いいよ。気にしなくて。きみは大丈夫？」

「うん、大丈夫」

「気をつけて帰るんだよ」

路地から丈人と女が出てきた。高校生くらいだろうか。不良っぽい女だが、可愛い顔をしていて小柄で、俺の趣味のタイプではあった。

「あの男がきみに言ったのが漏れ聞こえたんだけど、そんなことはするんじゃないよ。小遣いがほしいんだったら、正当なバイトをして稼げ」

「普通のバイトなんて給料安いし……」

「そうだとってもだ。きみがそんなことを考えているからこそ、あんな男につけこまれるっての

もあるんだろ。二度とあんな奴とはつきあうなよ」

「……名前、なんていうの？」

「名乗るほどの者じゃないさ」

かっこいいといえばかっこいいが、クサイとも言える台詞を吐いて、丈人は女に背を向けた。女はぼわーんとした顔で丈人を見ている。今の会話からすると、女はウリでもしようとしていたのか。俺もなんとなく女を見ると、つんとされた。

「あんたって男がいいの？」

弟たちのほうへと戻ってきた丈人に、女が言った。

「その子、あんたの……？」

「そうだよ。俺はそっちの趣味だ」

「ちょっと……」

俺は焦ったのだが、丈人は俺の肩を抱き寄せた。真次郎はうげげと言いたそうな表情をしたのだが、先にラーメン屋に入っていった。

「その子だって未成年だろうに」

「こう見えてもこいつは十八なんだよ。さ、坊や、行こうぜ」

「ちょっとあのね……」

「うるせえんだよ、ついてこい」

サイテーッ!! と女の罵言が聞こえ、彼女は走り去っていき、俺は丈人の手を振り払った。

「ああやって女から逃げてるの？ 俺がいなかったらシン兄ちゃんと？」

「真次郎にもやったことはあるんだけど、あいつは反射的に俺を投げ飛ばそうとしやがった。だから、真次郎といるときには別の手段だよ」

「どんな？」

「経験してみたいか、章？」

「……いない」

この態度は人間離れしているとは言えないのだろうが、兄貴離れしているのではなかろうか。弟を女から逃げる手立てに使うとは、サイテー!! と書いた女に賛成したい。丈人は澄まして煙草に火をつけ、なんにもなかったかのごとく、ラーメン屋に入っていった。

これは使える、と丈人は感じたのだろう。二度目なのだから俺も慣れたといおうか、慣れたのではなく諦めたので、丈人に合わせた。

「俺は女には興味ないんだよ。こいつが俺の可愛い坊やだ。坊や、行こうな」

「……うん、いいけどね」

今夜は丈人とふたりきり。真次郎はなにやら用事があるとかで来なかったのだが、ふたりで夕食を食ったあとで、俺にとっても何回目かになるシーンに遭遇した。いつものように丈人は男を蹴飛ばして追い払い、いつものように女に惚れられたのだろう。

惚れられた女にいちいちつきあっては身が保たないってわけか、今夜も丈人は、俺を恋人だとよそおって逃げようとしている。だが、今夜の女は簡単には立ち去ってくれなかった。

「あなたってそんなふうには見えないけどな」

「見えなくてもそうなんだよ。証拠を示そうか」

「証拠ってどうするの？」

ぐいっと抱きしめられて、俺はもがもがもがいた。ただの人間だったころの丈人にだって、こうやって抱きしめられたら逃げるすべはなかった。抱きしめられた記憶はないのだが、とっつかまえられたことはあるのだから、同じであろう。

ただの人間の兄貴たちにだって、俺は断じてかなわなかったのだから、百万馬力くらいはありそうな兄貴から逃れられるはずもない。軽く抱かれていても息が詰まりそうだった。

「あ……苦しいよ」

「苦悶の表情が快感に変わっていくんだな」

「変わる……変わらない……うげうげ」

「意味不明のこいつの呟きも、快感に変わりつつある喘ぎなんだよ。わかっただろ」

「そんなの、冗談でだってできるよ」

女はかたくなに言い、丈人は言った。

「男は通常、男を抱きしめたくなんかないんだよ。俺みたいな趣味の男でないと、男の子なんか抱きしめたくないんだ。もっとやらないと信じない？ 坊や、目を閉じろ」

「え？」

「キスまでお見せしないと、お嬢さんは信じてくれないようだよ」

「そんな……」

「恥ずかしいか。可愛いな、坊や」

「う……げ……」

力を込められてはいなくても苦しい上に、兄貴にこんな目で見つめられると気持ちが悪くて、気が遠くなってきた。

「あまりの快感に気絶しそうになってるのか。お嬢さん、わかっただろ。俺は坊やを抱きしめただけでこんなふうにしてしまえるんだ。気絶しちまったか。では、俺はこいつをふたりきりになれるところへ連れていくよ。もういいよね、お嬢さん？」

「それはそれで素敵かもね。私が……ううん、その趣味がないんだっらしょうがないか。坊や、可愛がってもらいなさいね。いいないいな」

変な誤解をしてくれたのは、兄貴のためにはありがたいのだろうが、俺は気持ちが悪くてしょうがない。ようやく女が立ち去ってくれと、俺は言った。

「離してよ。苦しいってば」

「力なんか全然入れてないぞ。おまえはあいかわらず弱いんだよな。章、顔が赤い？ おまえまで俺に惚れたのか。兄貴に惚れるなよ」

「誰がっ。苦しいから顔が赤いんだ」

「.....誰も見てないな」

誰も見てないからってなにを？ キスされる？ まさかまさかまさか。それだけはやめろっ!! と俺は内心で絶叫していたのだが、キスされたのではなかった。

持ち上げられて放り投げられた俺は、地上数メートルの高さまで飛んでいき、そのまま落下して兄貴の腕に受け止められた。眩暈がして兄貴にしっかりしがみついている俺の耳に、笑いまじりの兄貴の声が聞こえた。

「最近、まともに闘ってないんだよな。さっきのだと脚しか使っていないから、腕力のトレーニングだ。おまえでは軽すぎて鍛錬にもなりやしない。真次郎とやろう。帰るぞ、章」

「シン兄ちゃんとタケ兄ちゃんが取っ組み合いなんかすると、マンションがこわれるよ」

「こわさない程度にやるから大丈夫だ」

そうになったら俺は逃げよう。それからそれから、これからは丈人とふたりっきりで外出するのはやめよう。あんなふうに使われてばかりいたら、身が保たないのはこっちだ。

もともと強い男を選んで地球防衛軍のメンバーとしたのならば、俺は選ばれなくても当然だろう。それはそれでいいのだが、ちょっとばかり悔しい。悔しくもあるが、俺にはそんなものは向かないだろうから、選ばれなくてよかったとも思う。

地球防衛軍には女もいるのだそうだが、そんな話を兄たちがしてくれていると、俺は思わず真剣に聞き入ってしまう。信じてはいないのだが、すっかり乗せられてしまっている。女もいるのかあ。でもさ、そんな女には会いたくないな。俺、絶対にその女に負けるじゃん、であった。

いいんだいいんだ、俺は普通の人間でいい。地球防衛軍が本当だとしても嘘だとしても、俺は普通に生きて、平和に暮らそう。しんどいことは兄ちゃんたちにおまかせしておけばいい。そう決意していたところに、丈人が言った。

「章、頼まれてくれないか」

「なに？」

「おまえにしかできないことなんだよ。真次郎、言え」

「うん。俺からも頼むよ」

「だからさ、なんなんだよ」

なんとなく悪い予感。俺までを地球防衛軍に入れると言い出すのではないだろうか。改造されて強くなるのは誘惑的ではあるが、俺の今後の人生設計が狂ってしまう。

だって、俺は普通に高校を卒業して、普通に大学生になって、普通以上に女の子にもてて、楽しい学生時代を送りたいのだから。大学を卒業したらどうするのかまでは考えていないが、とりあえずは普通にかっこいい大学生になりたい。

うーん、どうしようか、でもでも、強くなれるってのはいやでもないしな、と悩んでいる俺に、真次郎は言った。

「地球防衛軍には女がいるとは言ったよな。しかし、俺たちの担当地域にはいないんだ。比較的近い地域にはいなくもないけど、彼女たちだって各自の任務に忙しい。頼めるのはおまえだけなんだよ」

「女って……」

「俺たちはこの身体つきだろ。おまえにしかできないんだよ」

「……あのさ……」

「おまえだったら小さくて細いし、顔も声も女の子っぽくなくもない。できる、おまえにだったらできるよ」

かたわらでうんうんとうなずいていた、丈人も言った。

「おまえも地球のために働けるんだ。名誉な話だろ。俺たちの役に立ってくれられて、引いては地球の平和のためにもなるんだ」

「そんなそんな……女の子が必要なんだったら、兄ちゃんたちの彼女に頼めばいいだろ」

「彼女たちに危険な真似をさせられるか。それにだ、俺たちは彼女には俺たちの正体を話してはいないんだよ。章、おまえは察しがいいじゃないか。やってくれるよな。真次郎、持ってこい」

「なんのために女の子にならなくちゃいけないんだよっ!!!」

「軍事機密だ」

丈人は重々しく言い、真次郎が女の子の服を持ってきた。

「章、脱げ。着ろ」

「兄貴、化粧ってのもしたほうがいいんじゃないのか？」

「この年の女の子だったら、素顔のままでも自然かな。しかし、章の顔は化粧したほうが女らしくなるだろうな。先に服を着ろ」

「えええ、やだよお」

ためらっていると嫌も恥もなしに服を脱がされた。下着もそろっている。彼女にでも借りたのか？彼女に服や下着を貸せと言うと変態扱いされるかもしれないし、俺とはサイズが合わないかもしれないのだから、買って来たのだろうか。

花柄の可愛らしい上下セット下着は新品。フリルのついたピンクのワンピースも新品だから、買って来たのだろう。兄貴たちときたら、ワンピースはともかく、どんな顔をして下着まで買ったのだろう。買ったにしても店員に変態視されていたのではあるまいか。

「早く着ろ」

「着ないとぶっ飛ばすぞ」

ふたりがかりで脅迫されて、やむなく下着をつけた。俺の胸にはふくらみなんぞはないので、Aカップブラだ。その感触は妙に倒錯的で、男のパンツとは異なる形のパンツもつけたら、さらに倒錯的で、今夜も頭がくらくらしてきた。

長めの丈のピンクのワンピースを着ると、足元がすうすうして頼りない。ボブヘアのかつらまでをかぶせられると、丈人がほっと息を吐いた。

「似合うじゃないか。章、おまえに恋をしそうだよ」

「兄貴、あんた、この間から変じゃないか？ 変態になってきたんじゃないだろうな」

「恋をしそうだとただで、弟に恋をしたのではない。だけど、可愛いだろ」

「うん……まあ、可愛いな」

真次郎までがそう言うので、俺は鏡を見た。

ダークブラウンのボブヘア、ピンクのワンピース、このスタイルをしていれば、俺は本当に女の子に見える。身体にぴったりはしていないワンピースなので、プロポーションも女っぽく見える。腕や脚は袖とスカートに隠れているので、本物の女の子みたいだ。俺もついつい、可愛いじゃん、と言いつつ、からくも口を閉じた。

「やっぱ口紅くらいはつけたほうが、よりいっそう女の子らしくなるぞ」

「真次郎、おまえ、口紅も買って来たのか」

「念のためにさ」

「どんな顔して買ったんだ？」

「こんな顔してだよ」

やはり丈人もそう思うのだ。俺だって、女ものの下着や服や口紅を買うときに、兄貴たちがどんな顔をしていたのか見てみたい。

けっこうもてるのだし、女とつきあったことは何度もあるのだろうが、真次郎は女に口紅をつけてやった経験はないのか。なくて当然なのか？ なのだから、俺に口紅を塗ってくれるとなっても失敗ばかりしていて、口裂け女みたいな顔にされた。

それでも、幾度目かには化粧が成功し、口紅をつけた俺の顔を、俺も鏡で見た。実際、本当にかなりの美少女に見えた。

「おまえが妹だったらな、って想像したくなるよ。真次郎、どうだ？」

「俺はそういった意味もない想像はしないんだよ。章は弟なんだから、妹だったらどうこうって考えても埒もねえだろうが」

「そうだな。埒はらちでも拉致。こいつを拉致していこう」

「らち？ 拉致か。うん、章、行くぞ」

下らねえことを言っている兄貴たちに、俺は言った。

「どうやって行くの？ 俺は空は飛べないよ」

「歩いていくんだよ。パトロールじゃないんだから、尋常に歩いていくんだ。俺たちだって人間の姿では空は飛べないんだ」

言った丈人に、俺は尋ねた。

「地球防衛軍の車ってのはないの？」

「ちょっと遠いから、自転車で行こうか」

しょぼい。しかし、地球防衛軍の車がないのだったら、俺たちにも車はないのだから、自転車しかないのだろう。どうせだったら兄貴たちが人間の姿で空を飛び、俺は兄貴たちに両手を引かれて空中散歩、だったらいいのにな。

それってスーパーマンと彼の恋人みたいじゃん？ と俺も空想していたのだが、それだったら俺がスーパーマン役をしたい。ワンピースを着ている本物の女の子と空を飛びたい。

現実的に考えれば、上空は風が強くて、スカートがはためいてまくれ上がるかもしれない。男の俺のスカートがまくれるなんてのは、想像しても楽しくもなんともない。兄貴たちに手を引かれて空を飛ぶ空想も楽しくはないので、考えるのはやめにした。

軍事機密だとは言ったが、自転車でどこへともなく拉致されていく道々で、丈人が話してくれた。俺は丈人が漕ぐ自転車のうしろに乗せられているのだから、丈人の声しか聞こえないのだった。

「……メイド？」

「おまえの声は男らしくはないし、見た目もそれだと十分に女の子なんだから、女だと言ったら信じてもらえる。ただし、喋り方には気をつけろ。俺なんて言うんじゃないぞ」

「住み込みメイド？ そしたらばれるじゃん」

「気をつけて話し、立ち居振る舞いに気をつける。そうしていたらばれないよ。メイドなんだから、主人がおまえの着替えを覗いたりはしないだろ」

「……そうかなあ」

地球侵略をたくらむ悪の宇宙人の手先だかなんだかは知らないが、俺がこれから連れられていく家の主は表向きは人間で、会社社長なのだそうだ。山崎という名の中年オヤジは独身、ひとり暮らしで、メイドを探していた。

どうやってだかは知らないが、兄貴たちは山崎に取り入り、メイドを紹介すると申し出た。そうしてこの美少年の弟が美少女の妹に変身させられ、山崎邸にスパイとして入り込むという段取りになったのだそうだ。

なにがなんだかわからないことばかりだが、一応は納得するしかなく、やがて、自転車が山崎邸の門の前に到着した。相当に豪壮な住宅だ。この家におっさんがひとり暮らし？ 他にもメイドがいるんじゃないのかと思っている俺に、真次郎が言った。

「メイドは何人も雇ったんだそうだけど、じきにやめてしまうんだそうだ。それだって山崎が怪しいって証拠になるだろ」

「セクハラオヤジなのかもしれないじゃん？」

「そこをおまえが探るんだよ。あとから着替えだのなんだのを届けてやる。おまえの仕事のために必要なものも届ける。がんばれよ、章」

「ええーっ、おっかないよっ!!」

今さらながら不平を言って逃げ腰になると、両側から兄貴たちに頭を殴られ、両腕をつかまえられて脚が宙に浮いた。

「俺は兄ちゃんたちの妹じゃないのかよっ。女の子扱いしてよっ」

「無事に帰ってきたら、妹としてたっぷり可愛がってやるよ」

「兄貴、あんたやっぱ……いやいや、どうでもいいことを言ってる場合じゃない。章、おしとやかに歩け」

おしとやかってどうやって歩くわけ？ とは思ったのだが、ここまで来た以上は逃げられないのだったらやるしかない。俺にできる範囲で女っぽくふるまおう。伏せ目になって小股で歩き、俺は兄貴たちのあとからついていった。

「晶と申します。水晶の晶でアキラです」

丈人が俺の紹介をしている。偽名なんか使うよりはやりやすいだろう。漢字は無関係なのだから、呼び名がアキラであればそれでいい。

「若いな」

太い男の声が近づいてきて、俺の顎に指がかかった。そのときはじめて真正面から見た山崎は、えらく渋くてカッコいい男だった。

「十五歳なんですけど、俺たちの妹なんですから、家事一切をやらせています。家事ってのは仕込んでありますから、ひと通りはできますよ」

「他には心当たりはないんですから、小娘ですけど、辛抱してやって下さい」

「ふむ。まあ、いいだろう」

見上げた山崎は背も高い。恰幅がいいというのか、がっしりした筋肉質の身体に、ゆったりしたシャツをまとっている。太い眉の下の眼光が鋭くて、見つめられるとたじろぎそうになった。

心の準備もろくろくできないでいるうちに、その日から俺は山崎家の住み込みメイドにさせられた。兄貴たちは帰っていき、山崎は俺に言った。

「仕事は明日からでいい。今夜はやすみなさい」

「ええと……うん、そうする」

「返事ははいだろ？ おやすみなさいは？」

「はい、おやすみなさいっ!!」

「怯えなくてもいいよ。おやすみ、アキラ」

でかい兄貴たちにも威圧感ってやつはあるのだが、山崎の威圧感は桁がちがう。優しく微笑んで見つめられていてさえも、俺は、いや、あたしは足が竦みそうになっていた。

紺のワンピースに白いふりふりエプロン。白のストッキング。メイドルックに身を包んだ俺、ではなくあたしの晶は、鏡に見とれたくなくなってしまう。

高校一年でも発育の早い奴はいて、髭の剃り跡のある同級生もいる。脛毛もじゃもじゃの奴もいる。兄貴たちなんぞは髭も濃いし、身体のアチコチがもじゃもじゃしているのに、俺にはそんなものはない。髪は豊かだが、体毛ってのはほとんどない。

無精ひげをはやかした丈人のほっぺたを顔にこすりつけられて、痛いよっ、と騒ぎながらもきゅきゅと笑っていた、ほんのガキのころだったらともかく、最近は髭のはえない子供っぽさがコンプレックスになりつつもあった。

この華奢で背の低い身体も、高い声も、力がなくて兄貴たちに頼りっぱなしで、とことんもとことんガキ扱いされるところも、コンプレックスではあった。

が、俺ではなくあたしとなった晶にとっては、コンプレックス箇所は好都合だ。こういった外見と声の弟だからこそ、兄貴たちは晶を晶に変身させ、女装させて山崎家のメイドとして送り込んだ。あたしだって兄ちゃんたちの役に立てるんだったら、びびらずにがんばろう。

「晶、可愛いよ。生まれたときから女の子だったらよかったのね。そしたらさ、兄ちゃんたちだってあたしを荒っぽく扱わずに、可愛がってくれただろうに。でも、今回は兄ちゃんたちに協力できるのよね。家事を仕込んであるって兄ちゃんはやったけど、そんなでもないってのが心配でもあるよね。あるわよ、か？ あんまり女っぽいのも変だし、女の子だって女言葉なんて使わないのが普通なんだから、これでいいよね。料理は苦手だけど、掃除や洗濯だったらできるもんね。なんとかなるでしょ。がんばってね、晶」

鏡に向かって女の子っぽく喋る練習をしてから、俺、ではなくあたしは、キッチンへと出動した。

外食やコンビニ食ばっかなのだから、料理はろくろく作れないが、おまえは暇なんだから、高校一年には時間が余ってるだろ、掃除しておけ、と兄貴たちに言われて、掃除は全部やらされている。適当にやっても不平は言わないのは、兄貴たちも大雑把な性格だからだ。

洗濯もやらされているのだから、三大家事のうちのふたつはできる。山崎は多忙な身で、家で食事するのはめったにないらしいから、料理はできなくてもさほどに支障にはならないだろう。

今朝はまず朝食の支度だ。なんだっていいよ、朝は食欲がないから、と山崎は昨夜言っていたので、コーヒーとトーストでいいだろう。トーストを焼いてバターを塗り、コーヒーメーカーがコーヒーを作るのを見ているくらいだったら、ガキにだってできる。

注意深くコーヒーをカップに注ぎ、食卓を整えていると、ガウン姿の山崎がダイニングキッチンにやってきた。

「おはよう、晶」

「おはようございます。コーヒーにはお砂糖とミルクは入れますか」

「ブラックでいいよ」

このおっさんがミルクと砂糖たっぷりのコーヒーとは似合わないの、ブラックでいいと言われて納得した。新聞も差し出すと、山崎はコーヒー片手に新聞を読む。トーストには手をつけ

ない。四十代くらいなのだろうか。渋い横顔は相当に整っていた。

メイドってのは仕事がすんだらどうするのだろうか。控えていなくてはいけないのかと、あたしは山崎の近くに立っていた。無言で新聞を読み、コーヒーを飲み干すと、山崎は無言で立ち上がって出て行ってしまった。

「トースト、食わないのかよ。せっかく作ったのに」

文句を言いつつ片づけていると、笑いまじりの山崎の声が聞こえた。

「今どきの女の子は食うって言うのかもしれないけど、聞き苦しいな。女の子は女の子らしく喋ったほうがいいよ。あんな荒っぽい兄ちゃんたちと暮らしていたんだから、女の子らしくなれって言っても無理かな」

耳のいいおっさんだ。ひとりごとにも気を配らないといけない。山崎の声が廊下を遠ざかっていき、その日はそれっきり、おっさんは帰ってこなかった。

宅配便で届いた大きな荷物には、女の子の普段着や日用品などの細々した品物が入っていて、丈人と真次郎連名の手紙も同封してあった。

「料理はインターネットでレシピを見たら、晶にも作れるものが載っている。メイド、がんばれよ。兄たちより愛する妹へ。心を込めて」

おっさんに見られては困るので無難な文章にしてあるのだろうが、字は丈人だ。愛する妹へ、だなんて、真次郎だったら言うだろう。気持が悪い、と。

あの兄貴たちは顔立ちは正反対で、丈人は美青年、真次郎は野性的青年。体格は似ているし、性格も似ていると思っていたのだが、大学生になってから変わったのか。改造人間にされて性格も変化したのか。

昔から真次郎の性格はああだったはずだが、丈人は六つも年上なだけに、ガキだった俺には内面がつかみ切れていなかったのかもしれない。真次郎はごく平凡な、というか、今どきでは珍しいほうの荒っぽい男で、丈人は恥ずかしげもなく弟にもあんなことを言ったりしたりする、変な奴なのだ。

改造人間となって性格が変わったのではなく、丈人はもともとあんな奴だったのだろう。あんな奴だとしても頼りにはなるのだから、俺は兄貴たちが嫌いではない。宇宙人だの改造人間だのを心底からは信じてはいないが、部分的には信じるしかない。ずっと守ってもらってばかりいた俺が、今回は兄貴たちの役に立つのだったら、がんばろう。

幾度目かの決心をして、俺は料理の勉強をした。無事に兄貴たちのもとに帰れたとしたら、料理の腕前も役立つだろう。

無事に帰れたら……丈人は言っていた。妹としてたっぷり可愛がってやる？ それってどういう？

かなり怖いのではないだろうか。それよりも前に、無事に帰れたら？ 帰れない可能性もあるのか。あるのかもしれない。そっちのほうがもっと怖い。

怖いので無事に帰れなかったら、なんてことは考えないようにして、俺はメイドとしての毎日をすごしていた。山崎のおっさんは不定期的に帰ってくるものの、食事なんてほとんどしない。俺が作るのは朝食くらいで、トーストさえも食わないおっさんなのだから、コーヒーだけでいいようだ。コーヒーを淹れる腕だけは上がったはずだった。

そんなある日、夜になって山崎が帰宅した。居間のロッキングチェアに腰かけ、ブランデーグラスを手に葉巻をくゆらせ、クラシック音楽を聴いているおっさん。絵になるというか、あまりに典型的なおっさんのくつろぎ図で、見ていて恥ずかしいというか。

「晶、なんでもいいからつまみになるものを持ってきて」

キッチンで控えていた俺に、ではなく、山崎がいるとあたしと自称しなくてはいけない。あたしは、小型のオープンサンドを作って運んでいった。

「晶は高校生じゃないのか？」

ああ、ありがとう、と言ってから、山崎が尋ねた。

ただいまは学校は夏休みで、だからこそあたしはメイドなんかやっつけられるのだが、夏休みが終わるまでにこの任務は終了するのだろうか。そこんところは兄貴たちにおまかせするしかない。細かい部分についてはアドリブで対応しろと丈人に言われていたので、あたしは言った。

「高校は休学中なんです。あたし、勉強よりもお料理やお掃除のほうが好きですし」

「そうか。だったら、早く結婚するといいな」

「結婚なんて……」

もじもじのポーズ。自分で自分を見たら吐き気をもよおしそうだが、見えないのだからいいことにしよう。

「晶はコーヒーか紅茶でも淹れておいで。今夜はゆっくりできるから、話をしよう」

うっ、怖い。しかし、逃げるわけにもいかないのだから、あたしは山崎の命令に従ってアイステイを作り、おっさんの近くのソファにすわった。

「勉強が嫌いで家事が好きか。私の時代だったらいい嫁さんになれるって言われたらうな。今でもそういった女の子は貴重だろ。好きな男はいないのか」

「いません」

「メイドのプロになるか」

「プロになれるってほどではないから」

「このオープンサンド、うまいよ」

掃除は行き届いていないはずだが、気にしていないのか。あたしは恥ずかしがり屋の女の子を演じようと、もじもじうじうじポーズを続けていた。

「料理や掃除以外には好きなものはないのか？ 音楽は？」

「音楽は好きです」

「好きな作曲家だの指揮者だのはいる？」

「指揮者？」

好きなバンドや好きなシンガーならいるが、好きな歌の作曲家が誰なのかは全部は知らない。エリック・クラプトンだのジェフ・ベックだのゲイリー・ムーアだのってのは作曲もしたはずだが、指揮者なんて知るわけがないではないか。

このおっさんは音楽を聴くとなると、クラシックばかり流している。クラシックだって超有名な曲だったら聴いたことはあるのだが、あたしの知らない眠くなりそうな曲ばかり。

音楽といえばクラシックだと決め込んでいる、頭の固いおっさんなのだろう。この年代だとロック好きオヤジやおばさんだって多いはずだが、あたしはロックが好き、と言っていいものだろうか。もしや山崎がロックを軽蔑する人種だとしたら、ロック好きメイドなんていない、と言いきらないだろうか。

かといって、聞きかじっただけの指揮者の名前やら、どれがどれだか区別もつかないクラシックの作曲家の名前も出せないのだから、あたしはいい加減なことを言った。

「あたしはクラシックってよく知らないんですけど、山崎さんがかけてらっしゃる曲は素敵だと思います」

「そうか。なら、音楽をかけようか」

山崎が立っていき、オーディオにCDをセットした。流れてきた曲は？ 眠たいクラシックでは

ない。この歌は記憶にある。山崎ってこんな趣味もあったのか？

「一つ、ひりつく衝動が 閃き理性に一撃を
二つ、不埒な喚び声が 震える野性を誘き出す
三つ、禊の血飛沫は 水脈引き煉獄へと注ぎ
四つ、寄る辺なき我ら 夜ごと阿修羅に接吻を
夜の帳の裏側で 歌われたディバインコメディ
残酷なレディフォルトーナ 今宵もまた血に踊る
眠りを夢見るときにさえ 片目はしかと見開いて
静かに毒を呑むように 痺れた舌を突き出して
涅槃に微睡むときにさえ 刃はしかと握り締め
恐怖に澄める静寂に 訝す我らの子守唄
私の声が聞こえるか？
私の叫びが聞こえるか？」

こむつかしい歌詞なので意味はわかりにくいのだが、不気味な言葉を散りばめてある。あたしは思わず言った。

「この歌だったら知ってる。人狼狂詩曲でしょ？」

「ほお。よく知ってるんだな」

「あ……」

そのとき、半分開いた窓から月が顔を覗かせた。

今夜は煌々たる満月だ。月の表面に刻まれた模様までが見える。月にはウサギさんが住んでるんだよ、と父が教えてくれて、ガキのころには俺は信じていたのだが、宇宙好きの真次郎がガキの夢をぶっこわしたのだった。

「あれはひとつひとつが月の海って呼ばれてるんだけど、月の薄暗い模様の正体は、平原のような部分なんだよ。月はいつも地球に同じ面を向けているから、地球から見た月の模様は変化しないんだ。静かの海、雨の海、雲の海、嵐の大洋、そんなふうな名前がついてる。俺にとったらウサギなんかよりも月の海のほうがロマンだよ」

こんなにも大きく月が見えると、名前は海でも実際には平原だという薄暗い部分が、ウサギではなく真次郎が言った通りだと実感できる。真次郎は宇宙好きだからこそ、宇宙人に目をつけられたのだろうか。

綺麗というよりも、こうやってドアップで迫られると怖いみたいだ。俺は窓に張りついているかのごとき月を、口を開けて見つめていた。

にしても、大きすぎはしないのだろうか。月ってのはこんなに大きく見えるものか？ シン兄ちゃん、なんでこんなに月が大きいのか？ 光だって強すぎる。これでは月ではなくて……太陽でもなくて……なんなんだろ、これは？

月にばかり意識を向けて、真次郎に話しかけていたりもしたものだから、俺は山崎を気にもしていなかった。おっさんも月に見とれているのだろうか。意識が山崎に向き、振り向こうとした俺は、窓に写る異様なものを目に留めた。

「な、なに、あれ？」

女っぽい声を出そうだとか、女っぽくふるまおうだとか、そんなものは消し飛んだ。俺はソファからころがり落ち、素のまんまの声で叫んだ。

「うわーっ!! 化けものだーっ!! 兄ちゃん、タケ兄ちゃん、シン兄ちゃん、た、た、たっ、助けてーっ!! 俺、食われちゃうよーっ!!!」

こいつはあのおっさんか？ 人狼？ この曲に乗って変身したのか。こいつは狼男だったのか。狼男ってものは満月の夜に変身するはずだ。

なかなか芝居っけのあるおっさんだからこそ、狼男に変身するバックグラウンドに「人狼狂詩曲」なんて曲を使ったのか。絨毯の上に腰をついて、じりじりあとずさりして、兄たちの名を呼んで、それでも視線は山崎から離れない。

狼は動物園でだったら見たことはあるはずだが、人狼は普通の狼とは別ものなのか。真っ黒な剛毛が全身を覆い、指からは鍵爪。身体がひと回りもふた回りもたくましくなったようで、服は破れて周囲に散らばっている。

獐猛そうな黄金の瞳をして、牙を剥き出して唸っているのだが、狼男は恐ろしいばかりではなく見える。なんなのだろう、この感覚は？ どことなく、この狼男が美しくも見えるのだ。

「寄るな……近寄るな……兄ちゃん、助けて……助けて……」

視線は狼男に魅入られたようになって、ひたすらにまっすぐに見つめてしまう。あたしと自称しなくてはならないことなんかは完璧に忘れて、俺は叫んでいた。

「兄ちゃんっ!! 弟の危機だよっ!! 助けてよーっ!! 俺、狼男に食われちゃうよーっ!!」

いくら叫んでも兄たちには聞こえないのか。俺は狼男に食われるのか、あの爪で八つ裂きにされるのか。叫ぶ以外にはなんにもできなくて、スロースピードで後退しつつ、俺は何度も何度も何度も兄貴たちの名を呼んで絶叫していた。

「タケ兄ちゃんっ!! シン兄ちゃんっ!! 助けてよーっ!!!」

ついに涙があふれてきた。ぼろぼろ泣きながらも兄貴たちの名を連呼していると、ふっと狼男の視線が月に向いた。狼になると喋れないのか、山崎であったはずの男は、唸り声を発して窓に寄った。俺も視線で狼男を追うと、月をバックに小さな虫が……虫？ 虫は二匹いた。

「兄ちゃんっ!!」

涙でぐちゃぐちゃになった顔で、俺は声を限りに絶叫した。

狼男は窓を閉めようとしたようなのだが、時すでに遅く、二匹の虫が窓から入ってきた。虫たちは部屋に入った次の瞬間、みるみる変身して俺の愛する兄貴たちの姿になった。

「章、よくがんばったな」

丈人が言い、真次郎も言った。

「おまえの絶叫は聞こえたぜ。俺たちは耳がいいって知ってるだろ。化け物だーっ!! っのを聞いて緊急出動してきたんだよ。もう大丈夫だ」

「章、歩けるか」

「無理」

「ほい、こっちにいる」

腕を伸ばした丈人に抱き上げられ、ソファに降ろされた。真次郎はソファごと俺を持ち上げ、

広い部屋の隅まで運んでいった。こんな際でも俺は感心してしまう。なんたる怪力なのだろうか。

「狼男か」

ふたりの兄貴は化け物に向き直り、真次郎が言った。

「月からの侵略者なのか。兄貴、こいつはこの姿になると口がきけなくなるみたいだな」

「俺たちの言葉は通じてるのか。目には知性の色が見える。山崎さんと呼ぶしかないかな。山崎さん、俺たちがなにを言ってるのかはわかるのか」

「その姿になると人を食いたくなるのか。あんたは章を食おうとしたのか」

「あんたの目当てはなんなんだ」

兄貴たちがかわるがわる問いかけても、狼男は唸り声を上げるばかり。

「真次郎、狼男ってこいつは、地球人が創作した怪物とはちがってるみたいだな」

「狼男にもいろんなのがいるんだろ。兄貴は詳しいのか」

「ここで説明してる暇はないけど、さまざまにあるみたいだな。章、帰ったら教えてやるよ」

呑気にそんなことを言っているとは、やはりこの兄貴たちも人間離れしている。狼男と改造人間の兄貴たちと、四人で部屋の中にいるなんて、俺の世界はこれからどうなってしまうのだろうか。

「兄貴、俺たちの闘うべき相手か、こいつは？」

「地球防衛軍の任務ではなさそうだな。真次郎、どうする？」

「狼男ってのは月から来たのか。そうだな。俺は月に行ってみてくるよ」

俺はまたまた絶叫した。

「兄ちゃんっ、月まで飛べるのっ??!!」

「今夜の月は異常だろ。俺たちも気づいてはいた。もしや月がこうなったのが影響して、山崎や章の身に異変が……とも考えて、おまえの声に耳を澄ましてたんだ。案の定だったよ。虫になったら月までくらいは行ける。兄貴、章を頼むぜ」

「ああ」

月と狼男に関係があるのかないのか、俺にはさっぱりわからないが、兄貴たちはなにかしら知っているのか。丈人はこともなげに言った。

「明日には帰ってこられるか。待ってるよ」

「うん、行ってくる」

明日には帰ってこられる？ 超人なのだから当然なのだろうか。真次郎は虫に変身して、変わらず大きく大きく見えている月を目指して飛んでいった。

話しかけても山崎狼は口をきけないようで、返事はしない。かといって暴れるようにもなく、月を見ている。丈人は俺に言った。

「こいつは俺が見張ってるから、章、腕の上がったおまえの料理を食わせてくれよ。腹が減ってきちまった」

「兄ちゃんは……うん、もう信じたよ。人間離れしてるのは当たり前なんだよな。さっきはこれのおっさんに、オープンサンドを作ったんだ。うまいって言ってたし、材料は残ってるから兄ちゃんにも作ってやるよ」

「おまえはメイドルックなんだから、女の子の言葉使いで喋れよ」

「あ、そうだっけ」

自分がなにルックでいるのかも完璧に忘れていたのだが、見下ろすとふりふりエプロンとワンピースを着ている。もはやそんな格好をしている必要もないのだから、先に着替えてこようと考えていると、丈人は言った。

「歩けるようになったか」

「うん。大丈夫」

「泣いてもいないんだな。章、おまえ、強くなったじゃないか」

「そう？」

さっきはぼろぼろ泣いていたのも、メイドルックを着ているのも恥ずかしくなってきた、俺は部屋から出て男の服に着替え、手早くオープンサンドを作り、コーヒーを三つ淹れた。

「山崎さんも食えるのかな」

それらを部屋に運んでいくと、丈人は山崎に呼びかけた。

「あんたも食うか」

狼男はこちらを見もしない。月に恋焦がれているかのように見つめていた。

「通じてるのかどうかも謎だけど、こいつは獣そのものではなさそうだな。静かにしてるんだし、俺は食うよ。うん、うまいじゃないか」

サンドイッチを口にして、丈人は笑った。

「ほんとに呑気だよな。人間じゃないんだから当然なの？ シン兄ちゃんは月なんかに行って平気なのか？ 月って空気がないんだろ」

「虫の姿でだったら平気だ」

「月にはなにがあるの？ タケ兄ちゃんも行ったことはあるの？」

「あるよ。ざっと探索はしてきたんだけど、ざっとじゃわからなかったな。月には侵略者なんてのはいないはずなんだけど、俺たちの知らないことだってあるかもしれない。地球防衛軍の基地を月に作るって案が出てて、仮の建物はできてるんだ。真次郎はそこに向かったんだよ」

まるっきりSFの世界だ。現実感なんて俺にはなかった。

「月にも俺たちの仲間がいる。章にはまだ上っ面しか話してなかったけど、地球防衛軍はいろいろと……おいおい話してやるよ。信じたんだろ」

「信じるしかないじゃん」

この部屋には狼男がいるのだが、丈人もいれば恐怖は感じずにいられる。けれど、今夜のあれ

これを思い出す。兄貴たちが来てくれてよかった。これで俺は安心だ。俺を巻き込んだのは兄貴たちなのに、恨みよりも感謝が勝っていて、再び泣きたくなってきた。

「泣くんだったらメイドルックで泣けよ」

「なんでだよ」

「泣いてる弟よりは、泣いてる妹をあやしてやるほうが楽しいからさ。ま、しかし、弟でもいっか。章、よしよし、泣いてもいいよ。ごめんよ、怖かったんだよな」

「怖かったと言うよりも……」

安心したからだだよ!! と心で叫んで、俺は丈人の胸に武者ぶりついた。

「人狼狂詩曲」はとっくに止まっている。狼男は時おり唸り声を上げているものの、それ以外は部屋は静かだ。窓からはいっそう巨大な月が見え、俺は丈人に抱かれて泣いている。これってなに？ これはこれはこれはこれは……こうなった以上は、普通の生活をするなんて諦めないといけないのだろうか。

兄貴の胸であやされて、安心感が満ちてくる。幼稚園に通っていたころにだって、兄貴はこんなに優しくしてくれなかった。苛めっ子からは守ってくれたけど、悪ガキどもを追い払ったあとで、しっかりしろ、章、と言って俺の頭を殴った。

泣いてもいいよ、などと言われたのは生まれてはじめてだ。俺はそのまんま眠ってしまったらしく、目覚めたらそばに真次郎と丈人がいた。

「狼男は？」

きょろきょろと部屋を見回して言うと、真次郎が応じた。

「月に帰っていったよ」

「……嘘だろ」

「おまえは知らなくてもいいんだ。山崎は俺たちが闘うべき相手ではないとだけはわかったから、帰らせてやったんだ。章、おまえもそのうちには月に連れて行ってやろうな」

ほんのすこしは俺も知ったのだろうが、すべてを話してくれたのでもないらしい。これからおいおい……おいおいおいっ、と言いたくなる。知りたくないけど知りたくて、俺はこれからどうしたらいいんだ、とも思った。

「帰ろうか」

丈人が言って立ち上がり、俺には荷物をまとめろと命令した。

俺が丈人の言う通りにしている間にも、兄貴たちは話していたのだろうか。来たときと同じに丈人が漕ぐ自転車のうしろに乗っかって、兄貴たちと暮らすマンションへと連れて帰られる。朝の空には月はあるはずもなく、太陽がまぶしく見えた。

miracle boys

<http://p.booklog.jp/book/31486>

著者 : quianred

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/quianred/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31486>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31486>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.